

世界を愛したいと思いました。

存在することを肯定したいと思いました。

私が生きていることを認めたいと思いました。

在るように在ることが美しいと心の底から思いたいと思いました。

海の前では一人の人間も一つの命でしかないように

山の中では一人の人間も石ころや虫と同等でしかないように

石や木や土がそこに在り続け、生命を育みそして帰る場所にもなっているように

人も、ただの命としてそこに只在れる時、何か本来の「存在」を放つのではないかと思いました。

この土くれは一人の人間が「存在」をつくろうとした痕跡と蓄積。

海や山や石や植物、そして人が持つ「存在」というエネルギーの形象化の試み。

なんとも大袈裟で、無謀な挑戦。

しかしこれらをつくっているとき、私は私をやめて、少し命に近い存在でいられる気がしているのです。

何かを夢中でつくっているとき、ひたすらに山頂を目指して山を登るような、故郷の海を求めてひたすらに泳ぐようなそんな本能に似た衝動とエネルギーを感じることができるのです。

それは意味性を持つ以前のもので、意味を持たないが故にただ存在するということが極めて私には重要に思えるのです。

無意味な存在が在ることに意味があり、そしてそれは私の命が在るように在ろうとして藻掻いた形であり、

私は無意味な存在を肯定し愛することで、世界を愛せるようになりたいと思いました。

どこか遠くの存在の寄る辺を手探りで探しています。

醜さも、美しさも、心も体も受け入れて、在るように在れば良いのに。

純粹に存在しているということに憧れている。

2023年5月 広瀬里美